2711-2

W
学位論文
2711
2

論文概要書

李成市『古代東アジアの民族と国家』

本論文で追究する主題は、漢の武帝による楽浪郡設置以降の約千年にわたる、いわゆる「東夷」諸民族による古代国家の形成、民族の形成についての特殊具体的なプロセスの解明である。また、その基本的な視座は、従来この課題に対して、色濃く投影されてきた国民国家の「民族」「国家」観を相対化し、それを克服したうえで、「東夷」諸民族による古代国家の形成過程を、東アジアという域圏における史的展開過程として位置づけることにある。

本論文の構成は以下のとおりである。

序　論　東アジア諸民族の国家形成における楽浪郡の歴史的位置
第１編　楽浪郡設置と高句麗の国家形成
第１章　東アジアの諸国と人口移動
一　問題の所在
二　楽浪・帯方郡と東アジア
三　五胡十六国と高句麗国家の展開
四　高句麗の南下と百済・新羅の国家発展
五　結語―朝鮮諸国の抗争と倭
第２章　穢族の生業と民族
一　問題の所在
二　穢族研究の動向
三　穢族の生業
四　穢族の習俗
五　結語―穢族の位置づけをめぐって
第３章　『梁書』高句麗伝と東明王伝説
一　問題の所在
二　『梁書』高句麗伝の史料的性格
三　東明王伝説と朱蒙伝説
四　高句麗の夫余出自説
五　結語―『梁書』高句麗伝の史料的位置
第４章　高句麗の建国伝説と王権
一　問題の所在
二　伝説の構造とモチーフとしての外来王
三　美川王即位紀の分析
四　美川王と高句麗王権
五　結語―高句麗王権と夫余族
第５章　高句麗泉蓋蘇文の政変について
一　問題の所在
二　クーデターの時期について
三　泉蓋蘇文の実像
四　クーデターの誘因と目的
五　結語

第２編　新羅国家の史的展開
第６章　蔚珍鳳坪新羅碑の基礎的研究
一　問題の所在
二　碑文の釈文
三　立碑年次と碑文の構成
四　「居伐牟羅」の所在地
五　碑文の分析と解釈
六　立碑の目的
七　結語―碑文発見の歴史的意義
第７章　新羅六停の再検討
一　問題の所在
二　六停の将軍
1　六停将軍の性格
2　六停将軍と軍主（都督）との関係
三　六停軍団の規模と存立基盤
1　完山停（下州停）より見た六停
2　六停と州兵
3　六停の存立基盤
四　結語
第８章　新羅僧・慈蔵の政治外交上の役割
一　問題の所在
二　慈蔵の関係史料とその事蹟
三　慈蔵の帰国と新羅の動向
四　九層木塔の建立と新羅の秩序世界
五　結語
第９章　新羅中代の国家と仏教
一　問題の所在
二　仏教統制機関
三　中代の仏教統関係官司
四　皇龍寺と中古の仏教
五　結語
第１０章　新羅兵制における浿江鎮典
一　問題の所在
二　浿江鎮典の組織とその統轄区域
三　新羅兵制における浿江鎮典の位置づけ
第３編　東アジア諸国の国際関係
第１１章　高句麗と日隋外交
一　問題の所在
二　高句麗の対倭外交の開始時期とその契機
三　高句麗の国際環境と外交戦略
四　国書の分析
五　日隋外交と高句麗
六　結語
第１２章　正倉院所蔵新羅氈貼布記の研究

一　問題の所在
二　氈貼布記の解読
三　毛氈生産の社会的背景
　1　新羅貴族の経済的基盤と手工業
　2　新羅の羊毛生産と加工技術
　3　新羅の毛氈と日本
四　氈貼布記と日羅交易
　1　毛氈の伝来過程
　2　八世紀における新羅・日本交易の歴史的背景
　3　朝鮮諸国の対倭外交
五　京師交易から大宰府交易へ
　1　通商貿易論批判
　2　交易が行われた時・空間
　3　交易の性格
六　結語
第１３章　八世紀新羅・渤海関係の一視角
一　問題の所在
二　方善柱説の検討
三　長人記事の典拠
四　長人記事の分析
五　新羅の東北辺と異人
六　結語
第１４章　渤海の対日本外交への理路
一　問題の所在
二　前期対日本外交の性格とその背景
三　後期対日本外交の性格とその背景
四　渤海の対外通交と五京・五道
五　結語

以上の構成のもとに論述した本論の概要を示せば、まず第１編「楽浪郡設置と高句麗の国家形成」では、楽浪郡設置によって東夷諸民族は圧倒的な格差をもった高度な中国文明に直接接触し、その中から特定の民族集団がそれを受容しつつ、次第に周辺諸地域に対する政治統合を果たしてゆくが、その過程で生じた、ヒトやモノの移動と東夷諸民族にもたらした社会変化、また諸民族相互間の影響関係について、高句麗の国家形成に主眼をおいて検討した。

すなわち第１章「東アジアの諸国と人口移動」において、楽浪郡設置後の高句麗の国家発展の推移を軸に、そこに複雑に関わった夫余・韓・倭・楽浪遺民（漢族）の動向を明確にし、東夷諸民族の国家形成と中国郡県との連関について動態的に把握することを試みた。

続いて第２章「穢族の生業と民族」では、高句麗に長く政治的に従属していた狩猟漁撈の民・穢族の空間的な移動に注目し、中国の郡県支配と高句麗の異民族支配のはざまで変容していく彼らの習俗を明らかにし、東夷諸民族と文明化の一面を浮き彫りにした。

そして第３章「『梁書』高句麗伝と東明王伝説」では、第１章で論じた国家形

成期の人口移動と高句麗王権の伸張との関わりについて、論点をいっそう明確にするために、その前提的作業として従来、先験的に信じられてきた夫余・高句麗同一民族説を再検討し、通説には後世の造作や錯誤が介在しており積極的な根拠がないことを実証した。次いで第４章「高句麗の建国伝説と王権」において、四世紀の高句麗の国家形成の画期と王権の伸張には、鮮卑族慕容氏の圧迫によって流移してきた夫余族が関わっていた点を建国伝説等の分析を通して明らかにした。

さらに第５章「泉蓋蘇文の政変について」では、高句麗末期の権臣・泉蓋蘇文の企図した政変の関連史料を分析して、政変の要因と高句麗の権力構造を解明するとともに、従来、中国側の論理（冊封体制論）をもって説明されてきた政変後の唐による高句麗遠征の背景について言及し、そのような論理が成立しがたいことを明らかにした。

私見によれば、楽浪郡の設置にはじまる東夷諸民族の本格的な中国文明との出会いの一応の帰結は、七世紀末から八世紀初にかけての東アジア三国（新羅・渤海・日本）における「律令国家」体制の成立にあるとみている。こうした作業仮説に基づいて第２編「新羅国家の史的展開」では、そこへ至る過程として、六世紀以降の新羅の国家発展に着目し、政治・社会・文化（宗教・思想）の各々について、新羅独自の「律令国家」体制形成とその成立過程をいくつかの側面から明らかにした。

まず第６章「蔚珍鳳坪新羅碑の基礎的研究」では、六世紀初頭における新羅が高句麗のくびきから離脱し、逆に隣接する旧高句麗民を服属させ新たな国家編成を試みる段階について、1988年に発見された碑文に対する独自の解読に基づき、法と習俗に着目して新羅の服属民政策を明らかにし、新羅の六世紀における急激な国家発展の素因について言及した。次いで、第７章「新羅六停の再検討」において、六世紀中葉になり旧加耶、旧百済領域までを侵食した新羅が、それらの領域民をどのように政治支配していったかという課題について、六停軍団の性格を明らかにすることによって、軍事編成の側面から、新羅の領域拡大にともなう地域統合の編成原理について解明を試みた。

一般的な理解によれば、新羅は三国統一をなしとげた670年代以降に「律令国家」体制へと変貌を遂げていくように考えられているが、それより遡って642年以降の対外的危機のなかで支配層を二分した内乱を経て、650年前後に、政治・外交・宗教の各方面にわたって諸改革が断行されており、これが「律令国家」体制への基盤となったとみることができる。第８章「新羅僧・慈蔵の政治外交上の役割」では、この過程を推進した金春秋・金庾信を支えたブレーントラストとしての慈蔵に注目し、当該期の改革のもつ歴史的意義を明らかにした。

次いで、第９章「新羅中代の国家と仏教」では、651年における、それ以前とは次元を異にした新たな仏教イデオロギー（国家仏教）による仏教政策の画期に留意し、651年を前後して新羅仏教の性格が大きく変化することを明確にし、あわせてこの時に統一新羅に向けて権力構造上の決定的な変革があったことをも言及した。さらに第10章「新羅兵制における浿江鎮典」においては、八世紀初葉に唐から割譲された新領域に対する辺防政策について、従来、判然としなかったその領域や、具体的な政策内容を解明し、その政策が東アジアの国際環境に深く根ざしていたこと、また、それが基本的に三国期の服属地域に対する編入原理に依拠していた点を強調した。

東夷諸民族は中国文明を、各々がおかれた条件のもとに受けとめ、また諸国家

がさらに複雑で濃密な交渉をもちながら、相互に影響を及ぼしつつ独自の国家発展をとげるのであるが、この過程における外交交渉の背後には、おしなべて大陸と朝鮮半島における複雑な相克と葛藤が介在していた。そこで、第3編「東アジア諸国の国際関係」では、当該時期の東アジアにおける複雑な外交関係について、まず第11章「高句麗と日隋外交」において、六・七世紀の高句麗と倭の緊密な外交関係には、高句麗の新羅・隋との厳しい対立がその背景としてあることを実証し、倭の対隋外交には、このような国際環境におかれていた高句麗との連携が前提となっている点を指摘した。次いで第11章「正倉院所蔵新羅氈貼布記の研究」では従来、通商貿易的な観点からのみ論じられてきた八世紀の新羅と日本の関係について、正倉院に所蔵される墨書の分析を手がかりに交易の実相を解明し、八世紀中葉における両国の大規模な交易が、東アジアの国際的緊張に根ざした政治的色彩の濃厚な戦略的外交の一環であったことを明確にした。

続いて第13章「八世紀新羅・渤海関係の一視角」では、二百年にわたり国境を接していた新羅と渤海の両国関係について、唐側に伝えられた説話を分析し、それが新羅の対渤海政策と新羅人の心性を忠実に反映していることを明らかにし、両国が長きにわたって敵対し没交渉であったことを推定した。さらに第14章「渤海の対日本外交への理路」において、二百年におよぶ渤海の対日本外交の性格とその背景を、二期に分けて考察し、渤海をして対日本外交に向かせた背景には、渤海をとりまく厳しい国際環境と、統合した靺鞨諸部族に対する服属政策に関わっていた点を明らかにした。

以上、第3編においては、東アジア諸国間の外交関係には各々に、大陸の中国諸王朝との国際的緊張が深く関わっていた点を重視し、従来ややもすると中国あるいは日本を中心に据えて、いわばその客体としてみられがちな高句麗、新羅、渤海の外交を、それぞれの主体的な立場から理解する視座を提示した。

本論文は、高句麗、新羅を中心に東夷諸民族の古代国家形成の過程を、東アジアという広域史的な視点から捉えようと努めたところに特色がある。これまでもそうした試みがなかった訳ではないが、それらは近代に見いだされた一国史の枠組みを前提とするものであり、単に考察対象の規模を領域的に拡大するにとどまる傾向があった。

本論文は、楽浪郡設置以来の中国王朝と東夷諸民族の葛藤や、それを媒介とする諸民族の発展過程、あるいは諸民族相互間の影響関係に留意したが、そのような有機的な関係性がみいだせる場として、東アジアという地域の設定がもつ独自の有効性を示した。

立論には、従来の学説を批判的に検討した上で、中国、朝鮮、日本に伝存する編纂史料および金石文、文書などの同時代史料を広く渉猟し、それらの分析と解釈に基づきながら、実証的な考察に努めた。また一方で、こうした文献学研究を基盤に、さらに近年の考古学上の成果をはじめ、文化人類学、経済人類学、神話学、法社会学の理論モデルをも参照し、史料上の制約を克服する方途を模索した。

これらの成果は、古代東アジア史研究の着実な方向を示すと共に、新たな視点と知見を提供するものと信じる。